

平成28年一般財団法人日本車椅子シーティング財団海外発表援助選考について

財団代表理事 廣瀬秀行

当財団は平成28年一般財団法人日本車椅子シーティング財団海外発表援助選考規定に基づき、平成28年6月アイルランド、ダブリンで開催されたヨーロッパ・シーティング・シンポジウムで河北家庭医療学センター杉山真理先生が発表された「THE CLINICAL EXPERIENCE AND MEASUREMENT OF BUTTOCKS SLIDING-FORWARD ON A WHEELCHAIR FROM A SEATED POSTURE-」(ずれ測定の臨床応用 ―座位保持装置の処方を通して―)と同シンポジウムで埼玉県総合リハビリテーションセンター清宮清美先生が発表された「DEVELOPMENT OF A METHOD OF MEASURING THE FORWARD SLIDING OF BUTTOCKS IN A WHEELCHAIR」(車椅子座位における殿部ずれ計測方法の開発)を優秀発表と認め、第一回海外発表援助を授与しました。

この発表は身体拘束等の原因となる車椅子からのずれ落ち計測の科学性を求め、それを臨床に応用したものです。日本での大きな問題となっていることを解決しようとしており、二つが関連していることもあり、今回の受賞となりました。以下に、抄録を掲載しています。

なお、平成29年の発表援助選考の実施は未定です。



車椅子座位におけるずれの測定方法の開発

埼玉県総合リハビリテーションセンター 清宮清美

【はじめに】

車椅子上で生じる臀部の前方へのずれは、褥瘡発生や転落、身体拘束などの問題を引き起こす。多くの場合、身体と車椅子の不適合により生じ、シーティングの介入を必要とする。ずれは定性的に評価され、簡便かつ定量的に評価する方法が確立されていない現状である。ずれから生じる問題点を解決するシーティングの効果を示すためには、測定方法を確立することが必要である。本研究では、ずれの測定法を開発し、信頼性を検討したので報告する。

【方法】

膝関節外側部、膝蓋骨下縁、脛骨粗面、大腿骨外側上顆をランドマークとして、シート前縁との距離を測定した。さらに、検者内信頼性と検者間信頼性を算出した。

【結果】

最も誤差が少なかったのは、膝関節外側であったが、触診しやすいランドマークであった膝蓋骨下縁をランドマークとして採用した。シートの前縁は、たわみや劣化の影響を受けるため、シートパイプ前端とした。正確に測定するために、差し金を使用することとした。級内相関係数は 0.9 以上であり、検者内、検者間ともに高い信頼性を示した。

【考察】

差し金を使用したずれの測定方法は、信頼性があり有効である。定量的な評価を行うことで、シーティングの有効性（効果判定）に役立つ。

ずれ測定 of 臨床応用 -座位保持装置 of 処方を通して-

河北家庭医療学センター 杉山真理

【はじめに】

第3回日本シーティングシンポジウムにおいて、車椅子上での身体 of 前方へのずれを測定する方法が示された。座位保持装置 of 処方を通して、臨床で使用した経験を報告する。

【方法・対象】

対象者は60歳台、男性。クモ膜下出血による四肢麻痺者。遷延性意識障害のためコミュニケーションは困難であった。ADLは全介助であったが、口腔周囲の刺激により開口が可能であり、食事は経口摂取していた。リクライニング車椅子を使用して、車椅子中心 of 生活を送っていたが、車椅子上で姿勢が崩れて、前方へのずれを生じ、姿勢修正 of 介助が必要であった。

理学療法では、前方へのずれ of 原因を明らかにし、車椅子 of 選択・適合を行った。さらに、介入前後でずれを測定し、介入 of 有効性を検証した。

【結果】

マット評価を中心に、身体機能 of 評価を行った。脊柱 of 可動性は乏しく、骨盤後傾・脊柱後彎を呈していた。股関節 of 屈曲は、右45度・左55度、膝関節伸展は、右-90度・左-80度であった。膝関節 of 伸展制限（ハムストリング of 短縮）とフットプレート位置 of 不適合が、前方へのずれ of 原因であると評価した。

膝関節90度屈曲位（従来使用していた車椅子 of 設定）と膝関節110度屈曲位 of 2通り of 設定で、車椅子座位1時間後 of ずれを測定した。膝関節屈曲90度では3~5cm of ずれを生じていたが、110度屈曲位では1cm of ずれであった。

【考察】

ずれを定量的に測定することで、姿勢 of 崩れに関する仮説を検証することができ、適切な座位保持装置を作成できた。